

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0878 ◆◆◆

26/02/12

【衆院選、「高市自民党圧勝で円安進行」は本当か!?】

筆者は、昨年11月19日付けの当レターで「今年『政治的激動の一年』、来年も!?」とレポートした。また内容的には、「もっとも早ければ来年1月にも、高市内閣が衆院解散・総選挙に打って出る可能性」、「野党第一党の立憲民主党が大敗し、その地位を国民民主党などに譲ることになる」との見方を取り上げていたが、大枠で的中した感もあり自分自身が一番驚いている。いずれにしても、そうした状況を受けて、近々第2次高市内閣が発足するわけだが、閣僚などは原則として再任の見通しとされ、金融市場においては顔ぶれの変更がないことが安心感を誘い「高市トレードの第2幕」を期待する声も少なくないようだ。

◎「昨年安値139.89円起点のドル高は最終盤」だと考えるが...

上記したように、詰まるところドル/円のリスクとしてドル高・円安方向を見込む向きが市場では優勢になっている感を否めない。

ちなみに、そんな為替の見通しについて、敢えてかなり煽情的なタイトルがつけられた報道を2つほどチョイスすると、「高市自民圧勝でやってくる『大・円安相場』」(現代ビジネス)、「高市自民圧勝、いよいよ始まる『円安亡国』」(ヤフー・エキスパート)と一なる。

確かに、気になるのはドル/円のチャートの波形だろう。改めて指摘するまでもないが、2023年以降足もとまでのドル/円はおおむねレンジ取引だ。ザックリ言って「140-160円」のなかでの一進一退をたどっていることがうかがえる。(下図、ドル/円の月足チャート参照)

これを逆に言うなら140円か160円、どちらかを「しっかり抜けてしまう」と、そのまま値の飛ぶ展開も否定できない。もちろん、すぐに到達することではないが、仮に上方向の160円という上限を超えた場合には、「1ドル=180円」などという話も決して有り得ない話ではないだろう。

したがって、そうした意味において、先月23日に「日本単独」、あるいは「日米共同」でレートチェックに動き、強力な防波堤となっている160円台への到達を阻止したということは大きな意味があったと言ってよい。

また、なかば余談めいたことを言えば、衆院選の選挙期間中に一部で悪意のある切り取られ方をして拡散した「高市首相が円安を容認している」との見方は、前述した円一段安、160円台乗せ阻止のレートチェックから、まるっきり「ウソ」だということが証明できるのではないかと思う。

一方、それとは別に筆者は、中長期スパンの見方はともかく、短期で見た場合に逆にドル高・円安も最終局面にあると考えている。

理由は幾つかあるのだが、もっともわかりやすいものをチョイスすれば、当レターで過去に何度も取り上げている「ドルの短期サイクル」になるだろう。詳細については、バックナンバーに譲るとして、「10-15ヵ月ごとにドルはボトムを付ける」というモノが骨子なのだが、「昨年4月22日につけた安値139.89円をサイクルボトムにしたドル高基調」が、いよいよ最終盤。つまりは上値追いの時間切れが近付きつつある気がしてならない。

ちなみに、これも過去にレポートしていることだが、「ドルの短期サイクル」からはドルが高値を付ける時期、そして高値レベルもわからない。わかるのは、次にドルがボトムを付ける公算が大きいタイミングのみで、それは「早ければ来月、遅くとも初夏ごろ」までに達成すると推測されている。

過去の流れを参考にすれば、ドルがピークを付けたのち、本格的に下がり始めて2-3ヵ月後にボトムを付けることが多いことを勘案すると、「ドルの上値追いもそろそろ」という結論になるのだが、果たしてこの見方は正しいのだろうか。それほど遠くないタイミングになるであろう、「答え合わせ」を是非とも楽しみにしている。(了)



